

〇2 旧 (社) 三重県青少年育成県民会議の役割 (財) 三重こどもわかもの育成財団で担っています

〇4 三重県松阪市内 小学生・中学生へ の意識アンケート調査報告

06 平成18年度青少年育成指導者のため の三重県スキルアップ研修会報告 07 わかすぎ時評③

全校生徒16名の中学校で、彼らが目覚めた「郷土の歴史」と「ボランティア活動の意味」

08 青少年育成功労者等表彰 編集後記 〈編集発行〉

(財)三重こどもわかもの育成財団 〒515-0054 三重県松阪市立野町1291

中部台運動公園内

TEL:0598-22-4911 FAX:0598-23-7792

URL:http://www.mie-cc.or.jp

旧(社) 三重県青少年育成県民会議の役割は (財) 三重こどもわかもの育成財団で担っています



三重県生活部青少年・私学室は、旧(社) 三重県青少年育成県民会議の管轄であり、現在も(財) 三重こどもわかもの育成財団で三重県健康福祉部こども家庭室とともに、三重県の管轄部局であることは同じです。

前回の『わかすぎ (第116号)』では、三重県健康福祉部こども家庭 室長の成松英範さんにお話を伺いました。今回は、三重県生活部青少 年・私学室長の松岡史子さんから投稿をいただきました。

1 財団の統合後の成果

三重こどもわかもの育成財団の青少年育成グループが行っている事業は、県民会議の時と特段の変化 はなかったはずですが、総会がないことから、間接民主主義の形式となり、少し遠い存在になったかな というのが、率直な感じです。

成果というと、簡単にはいえませんが、みえこどもの城と一緒になり、いろいろな方々との繋がりが広がってきたと思っています。青少年の健全育成というとたいへん幅広く、いろいろな専門分野の方々にお世話になっています。今まで青少年健全育成という意識はなくても子ども達の支援をしている団体や個人の方はたくさんみえます。財団とそんな方々と繋がりができ、いろいろな情報を連絡しあい、次には一緒に、または、財団の活動をお手伝いしますよといった関係ができていったらと思っています。

財団は、県民会議と比べると、歴史はありませんので、まだ名前が十分知られていないなどのご意見 もありますが、これからの活動に期待しているところです。

2 財団の課題

まず、基本は財団法人の憲法というべき寄附行為に書かれた事業をやっていかなければいけませんよ ね。

寄附行為には、財団の行っていく事業として、①情報の収集と提供、②調査と研究、③関係団体の育成と指導や連絡調整、④市町民会議等の地域活動への支援と指導者の育成などがあがっています。文字にすることは簡単でも、実際に確実に行っていくことは難しいことも多いのですが、これらのことをしっかりやっていけば、財団の目的がかなえられると考えています。

情報の収集と提供については、この機関誌「わかすぎ」が一番の情報提供となっています。わかすぎ には、毎回県内各地で活動している育成活動者や団体のみなさんの紹介をしています。よく読んでいた だくと、これらの記事はきっとみなさんの活動のヒントになると思います。その他には、財団のホーム ページがあります。内容は少しずつ充実してきていますが、例えば、財団のトップページの新着情報に 市町民会議の行うイベント情報の発信や、事業の募集や助成金情報など地域で活動しているみなさんが 困った時に頼りになるホームページを目指してほしいと思っています。今年度に市町民会議との間に連 絡網を整備することになっていますが、メールマガジンもつくっていってほしいですね。

県の育成事業についても、県民のみなさんに一番必要とされるのは、情報提供と考えています。

調査研究は限られた予算ですが、今年は、アドバイザー研究会のみなさんによる小学生と中学生の挨拶などに関する調査が行われていますが、三重県の地域の現状を調べて今後の活動につなげるということから、期待しているところです。

さらに、市町民会議をはじめとして、地域に出かけて、たくさんの方と知り合いになり、地域の情報をたくさん集めてきてほしいと思っています。

市町民会議や団体の方から「こんな育成事業をしたいのだけれど、指導してくれる人を教えて欲しい。」といった問い合わせに、すぐに答えられる、健全育成情報の知恵袋になってほしいと考えています。

事業につきましては、国民会議の多くの事業の地域拠点となっています。従来からの国民会議事業について地域の独自性を出していくことも可能でしょう。例えば、少年の主張について、地域の交流会で「子ども達の想いを聞こう」といった企画をしていただいていることは、少年の主張が単なる作文募集としてだけでなく、地域の子どもの学校生活や考えていること、いつも思っている意見を聴いたりする絶好の機会となっています。

中学校では、毎日の授業の中に新しい取組を入れていくことはむずかしいことでしょうが、学校の取組を地域の方々に知っていただく絶好の機会です。このことが、地域の目を中学校に向けさせ、中学校への支援や子ども達の見守りに繋がっていくのではないでしょうか。また、生徒達が地域のみなさんの前で発表することは、貴重な経験となっていきます。ぜひとも、各地の中学校が参加いただけたらとお願いしたいです。

また、人材育成ということは、いつまでも必要なことと思います。財団は、「青少年指導者のための通信教育」の受講料の助成や、青少年指導者のための各種研修参加に要した受講料や交通費の助成もしています。みなさんにあまり知られていないようですが、もっと利用していただけたらと思います。また、国民会議の通信教育を受けた方はアドバイザーとして活動してみえますが、みなさんお忙しい方ばかりでしょうが、もっと色々な場で力を貸していただけたらと感じています。

さらに、財団には、ボランティア制度がありますが、財団は県民の方々の力をより一層お借りして事業を行っていく必要があると思います。財団の呼びかけによって多くの方々が集まり交流会を考えたり、機関誌のインタビューを行ったりといったことができたらと思います。

また、三重県独自の事業も行ってほしいですね。県民交流会もそのひとつですが、財団の行う事業内容が良かったから、市町民会議でも、来られなかった人達のために、同じ内容の事業を地域で開催していくといった企画ができたらすばらしいですね。

いろいろ勝手な希望や提案などを申しあげましたが、目の前の事業をしっかり確実に行い、どんどん地域に出向いて、みなさんとのつながりや信頼関係を強くすることが一番と思います。

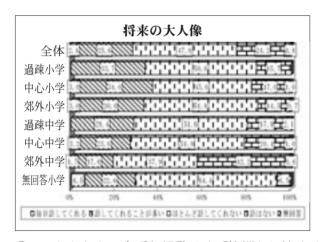
始めに、遠い存在になったかなと言いましたが、理事さんや評議員さんはみなさんの代表です。各地の市町民会議の代表の方が理事や評議員になっています。理事さんや評議員さんを通して、または、直接財団にどしどしご意見をいただき、みなさんと一緒につくる三重こどもわかもの育成財団となっていくことを期待しています。

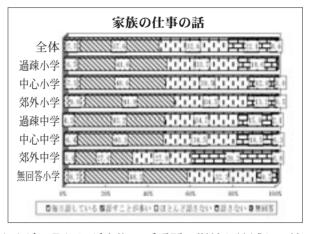
三重県松阪市内 小学生・中学生への 意識アンケート調査報告

三重県青少年育成アドバイザー研究会 長崎智次

平成18年度の三重県青少年育成アドバイザー研究会の活動として今回は松阪市の小学生・中学生への意識アンケートを行いました(約4000名)。近年の子ども達の意識実態については、個々の活動の中では行われているようではありますが、その調査結果などの情報は限られた範囲でのことであり、今回は三重県内でも子ども達への取組みが活発な松阪市の地域差(中心地・郊外・過疎)を含めて総合的な見地から調査を行いました。各関係団体におかれましては特に小学校・中学校には大変なご協力をしていただき誠にありがたくこの場をお借りして感謝いたします。その調査結果については、各協力校へはお届けしました。

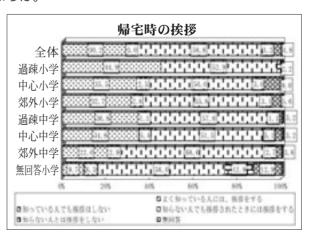
まとめをしていく中で感じるものは小学生から中学生へと少しずつ成長していく変化が調査結果に連動して受け止められるように思いました。

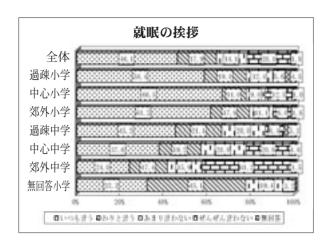


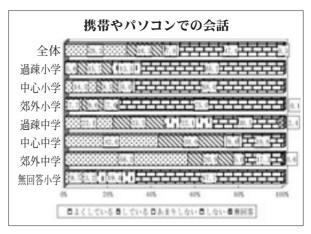


① こどもたちの身近な行動はまず挨拶から始まりますが、それらが家族、ご近所、学校と地域との接点になります。顔なじみになれる地域との関わりが少しずつ薄れていき、個人としての成長が個別化さらに自己の自立になってきていますが、繋がりの薄れた社会が広く蔓延してきているのは非常に危険な状態を作り出しているのではないでしょうか。

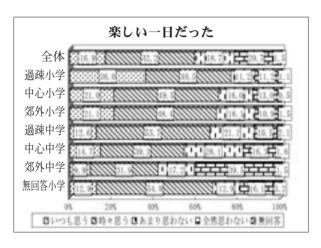


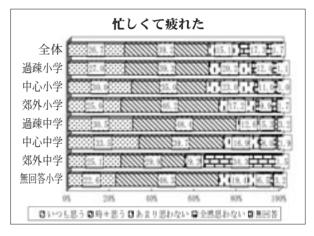






② 家庭の話に戻りますが、少子化のスピードはいっこうに衰えず、子ども達同士の交流もクラブ・学習塾との繋がりとなり、学校を終えたあとがその時間にとられてしまい、自宅に戻ってきた子ども達は疲れ果てている状態です。





③ 教育の補填を学習塾で行う、果たしてそれが真の姿なのか、教育という重要な事が知識攻めに終わっている気がしてなりません。

最近のニュースにもあるいじめ問題や犯罪が低年齢化してきている傾向など知識以外に身に付けな ければならない教育があるはずです。

今回のアンケートは、小学生・中学生を対象に行いましたが、高 校生・大学生・そして勤労青少年まで行えればもっと有効的な意識 調査が出来る事と思っています。

そして、若者が地域社会へ活動の場を広げていかないと、いずれ は空洞社会となり、地域は本来の世代交代が出来ない壊滅的な方向 へとしか進まないと思います。

三重県は自然に恵まれた環境の良い県ではありますが、反面、若い世代が働く場所を求めて都市に集中し、中心地・郊外・過疎との

地域差はこれからも続きます。私たち大人は何をしていかなければならないのかも重要な課題です。

私も一人の親として、将来を子どもに託すのではなく一緒に過して住み良い郷土を作り上げていきたいと思います。



平成18年度青少年育成指導者のための 三重県スキルアップ研修会報告

平成18年12月2日(土)に、松阪グリーンホテルにおいて、「子どもを地域で見守り育てよう!」というテーマのもと、「平成18年度青少年育成指導者のための三重県スキルアップ研修会」が開催されました。 県内各地から市町民会議関係者、青少年育成アドバイザー、県・市町行政関係者約60名の参加者が集い、 獨協大学法学部安部哲夫教授の基調講演、4名の県内の市町民会議代表者の活動事例発表、さらに安部教授、4名の活動事例発表者を交えたシンポジウムを行い、活発な意見交換がなされました。詳細については、ホームページに掲載予定です。

基調講演

子どもたちの安全と育成運動―条例改正をうけて地域で何をなすべきか(抜粋)

獨協大学法学部教授 安部哲夫

- 1. 青少年健全育成条例が全国各地で改正されており、その主な改正事項(青少年の深夜外出の制限強化や有害図書の販売規制などの地域環境の整備等)について、スライドを使用しての説明がありました。
- 2. 地域で何をなすべきかということで具体的な提言がいくつかありました。
 - ・子どもの深夜外出に対して、防犯グッズや防犯カメラより地域の目の方が優れていることを再認識し、粘り強い継続的な活動を。
 - ・コンビニを地域の中心点存在として位置づけ、育成拠点として活用しよう。

事例発表

基調講演に続いて、県内各地で日頃から行っている実践活動事例について、以下の4名の方から報告がありました。

「巡回の視点と情報の共有」

桑名市青少年育成市民会議長島支部 丹羽 量平 「地元のおっちゃんとして・・・(~殴られた後に~)」

桑名市青少年育成市民会議多度支部 佐藤 正幸

「青色回転灯装着車による個人的防犯活動」

松阪市青少年育成市民会議三雲支部 川口 博

「子どもの健全育成を図り安全・安心を確保する」

熊野市青少年育成市民会議 鈴木 美文



各発表とも、日頃の実践活動のときの服装で発表を行ったり、小道具を使用した説明やスライドを交えた報告でした。また地域的にも県内の北部、中部、南部からの発表であり、さらに内容や発表手法も個性豊かな報告でした。

どの活動事例も発表者が現場で直面している課題を含んだ内容ばかりであり、参加者の方々はメモを取るなどして熱心に聞き入っておられました。

事後アンケートでは、「大変満足できた」「ほぼ満足できた」と答えた方が全回答数の94%と、ほとんどの方に満足感を得ていただき、また、「各市町民会議の構成員が主体となり自発的な活動をされていることがよくわかった。」、「皆さんの積極的な活動に頭の下がる思いだ。説得力があるし、考える機会になる。」などと改めて活動への再認識をされたとの意見がありました。

今回、参加いただいた関係者には、この研修会で得られた成果を各現場へ持ち帰って、今後の実践活動に活かしていただけるものと信じております。そして、地域を越えた運動全体の活性化に繋がっていくものと期待するものであります。



全校生徒16名の中学校で、彼らが目覚めた「郷土の歴史」と「ボランティア活動の意味」

く生活の場が突然、世界遺産になってしまった>

Q : 荒坂中学校の皆さんが住むこの地域が平成16年に『紀伊山地の霊場と参詣道』として世界遺産に登録されましたね。世界遺産に指定されたと知った時はどんな思いでしたか。

男1:塾から帰ったら「熊野古道が世界遺産になった」て聞いて、前から聞いてたんで、あ、やっぱりって感じ。

女1:まさかなるとは思っていなかったので、ちょっとビックリした。

女2:ビックリしたし、あんまり熊野古道に関心なかったけど、テレビで言ってるんで、熊野古道はこんなん やったんかって思った。知らない所がテレビに映ってた。

女3:実感なかったけど、何回もテレビのニュースや新聞を見て、そうなんだと思った。

女4:熊野って、世界遺産になるほどすごいんやなあ、と思って嬉しかった。すごい所に住んでいるんだって。

女5:熊野古道が世界遺産になって観光バスなんかでいっぱい人が来るようになったので、あ~そうなんやって。でも、みんなゴミが増えてイヤって。

男2:最初はあんまり実感がなかった。

男3:これで熊野が世界に認めてもらったんやって。

男 1:嬉しかった。それに、先生が「富士山でも世界遺産になってないのに、熊野古道がなったんやぞ」と教 えてくれて、誇りに思った。

Q : 三重県教育委員会の「平成17年度 すばらしさ発見!『熊野古道』指定校事業」の指定校になりました ね。地元の熊野市二木島町について勉強されたそうですね。

教師: みえ熊野学研究会の三石 学さんや熊野古道語り部友の会の花尻 薫さんに来校頂いてお話を伺いました。

<熊野古道を歩く人と熊野の人の関係>

女4:300年も前に、那智大社と本営大社と遠宝大社へお参りする人達が歩く山道を地域の人達が歩きやすい ようにって、石畳の道を作ったりしていて、ゴミも無く保存状態が良 くてそのまま使える状態で残ってるから世界遺産になった。

Q :熊野の三つの大社へはどんな人たちが行ったのかしら。

女5:大漁とか病気とか、出産とかのお願いをしに行くのに、山の中とか家 の前とか人が通れる道は昔から限られていたからここを歩いた。

男1:女の人でも、お参りできたから。



Q:そうですね。熊野古道は老若男女が身分の上下なしに祈りのために歩いたんですね。人間の力を超えたところで願い事が叶うと思うと、貧しい人も身分の高い人もここを通ってお参りした。そして、今も熊野古道はずっと続いている。今、熊野古道はどういう人たちが歩いていますか?

男4:観光客。熊野古道を見たいために来てる。

女3:看板なんかがあって、世界遺産になったからどんな所か見たいから。

女2:遠いところから坂道を歩きに来るんや、疲れるのに。

Q : そうやね。歩くと疲れるもんね。昔の人は疲れても、大社の神さんたちは男の人にも女の人にも差別なく聞いてくれてたのね。皆さんは何歳ですか。

全員:15

Q : 15歳、若い! 15歳の人にとっては苦しい思いをして道を歩くのは考えられない?

全員:うんうん

Q : 片道 1 時間って歩いたことある?

男3:遠足で馬越峠。

女1:そこまで着くのは良かったけど、その上に行くのが結構時間かかったから。1時間くらい?

Q:1時間位歩きながらどんなことを考えたり思ったりしたかな。

女3:えらいな、(=苦しい) えらいなって。

女2:話ながら。しりとりしながら。

Q :3日も4日も1週間も1ヶ月もずっと歩きながら、何を考えるやろ。人々は何でそんな苦しい思いをし に熊野古道を歩いたと思う? 男1:その親とかの病気がなおることとか。

Q :そう、お願いしながら歩いていたかもしれないね。昔は大事な人が病に冒さ れたりすると、神様にすがる、そういう感じだったのでしょうね。熊野古道 が世界遺産に登録されて遠くから熊野古道を歩きに来る人が増えたのね。で も、ごみが出るのが嫌なのね、他に嫌なことってある?

男3:苔が踏み荒らされる。

Q :困りますね。ところで、熊野の人たちは昔から古道を参る人たちへ優しかっ たんじゃないのかな?

女3:そう。急病とか困っている人を助けてあげるのが普通だったって。

女1:遠い所から来る人々とのかかわり、関係みたいなものがあった。交流?

Q :素晴らしいですね。二木島町について勉強したことは、これからどのように活かしますか。

女5:ホームページを立ち上げて古道の情報発信をしたりとか。

男3:ボランティアでゴミひろいしていたら、ゴミを捨てる人が少なく なったので、そんなこと・・・。

男2:歩いてみたくなる気持ちのいい古道。

男4:歩くのはしんどいけど、海があって山があってきれいな景色の古 道を知ってもらう。

Q : 古道が世界遺産に登録されて大勢の人が来るのは、霊験あらたか ってことと、地域人たちがその暮らしの中で古道を大切に保存し

てくれていたっていうことでしょうね。皆さんの故郷は大きな誇りですね。よいお話をありがとうござ いました。



さいごに:中学生の人たちが未来に向かって故郷を語る姿は眩しいほどでした。熊野では豊かな生活文化の 維持、創造に貢献しようと大人も子ども達も頑張っています。"熊野人"としての誇りを持ち続けて、自然と の共生の情報発信をお願いしますね。 (文青:中两智子)



工 青少年育成功労者等表彰

11月1日 (水) に三重県人権センターで開催された「三重県青少年健全育成・非行防止関係者研修会」にあい て、長年、児童・青少年の健全育成にご尽力いただいている個人4名、団体1団体が表彰されました。また、11 月11日(土)に、東京の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された「青少年育成国民運動発足40 周年中央記念大会」において、青少年育成功労者等の表彰が行われ、三重県からは2名受賞されました。受賞さ れた方は下記のとおりです。 (敬称略)

財団法人三重こどもわかもの育成財団理事長表彰

<個人の部> 鈴木香山(桑名市) 服部幸市(四日市市) 諸岡文人(菰野町) 田岡陽子(熊野市)

<団体の部> 体験ひろば☆こどもスペース四日市(四日市市)

社団法人青少年育成国民会議会長表彰

- ・表彰状 <青少年指導者の部> 加藤二三子(鈴鹿市)
- ・感謝状 <個人の部> 佐々木道弘(伊賀市)



編集後記

子どもが小学校に入学する前から子どもと親の就学前教育に力を注いでいるのが、多民族都市のトロント市(カナダ)で す。家庭や社会生活でのコミュニケーション能力の育成など、さまざまなプログラムを小学校の教室へ親子が来て保育園の ような感じで実施しています。地域の親達の希望で出発したようです。子ども達が小学校へ入学してからも子どもには「自 分の学校」、親には「子どもの学校」という愛着心で、親同士のネットワークができ、地域社会へのコミュニティ意識が形成 されているようです(尾木直樹著「子どもの危機をどう見るか」岩波新書より)。学会出席の時にトロント市内を歩き回った感 想ですが、中国の人たちの町、ギリシャの人たちの町・・・・そして、子どもの為の動物園、子どもの為の博物館、子ども の為の・・・・。母国語や肌の色を超えて子育てを通して地域作りが成功していると感じました。

子どもが犯罪の犠牲者になるニュース、子どもの"いじめ"のニュースなどの事件を知るにつけて、継続的な地域力の必 要性を考え込みます。 『わかすぎ』編集長 中 西 智 子

